



↑ヤマボウシの実が真っ赤に熟れ、樹下に落下。大地を赤く染めていた。誰も採らない。(福島県いわき市にて)

→お客さんたちは気がつかないように、江戸川の水が変わった。若舟頭は「川が青くなった」というが、これまで茶色っぽかった水が澄んで透明感が増し、すっかり冬支度を終わっていた。



二十三日の土曜日はよく晴れた。今日は朝から薄ら寒い曇り日。

「昨日のほうが人が出ると思ったのに舟が一艘でまにあつた。今朝は曇りだからダメかと思つてら二艘で大忙し。

おかしなもんだね」

人はあてにならないものだと言ふ若舟頭はぼやく。

なにも、ぼやくことはないと思ふのだが、若はそういう人だ。

ぼやきが若の専売特許かと思つていたら、似たような人はどこにでもいるらしい。かくいう私もそうなのだが、「最近、甘いものばかりなんだもの、このくらい甘くないお菓子のほうが美味しいわね」

年のころ六十年代。団塊の世代前後のご婦人がぼやく。

「そうよ、あんまり甘いものは人気がないのよ」

娘だろうか。たぶん三十代だろう。

「甘くないから美味しくない」

孫だろう。小学生ぐらいの女の子。

昭和二十年代生まれの私たちの世代は、甘いものならなんでもよかつた。

今週のクマ

→クマのやつ、赤ん坊と対面させられ、腰が引けてしまった。自分とそれほど大きさがかわらない人間を見て、どんなふうにいるのだろうか。



↑韓国産の唐辛子のなかに白い虫がわいていた。激辛を好む虫もいる。もっとも、虫がわくということは安全な証拠なのだが気持ちはよくない。

砂糖など母親の目を盗んで新聞紙などに包み、ポケットにしのをばせておいて、ときどきなめながら遊んだものだ。

秋になると山にはアケビがあり、ヤマナシがあり、ヤマボウシ（前ページの写真）があった。甘くて美味しかった。

あらかじめ、どこにどの実ができるか記憶していて、食べごろになると誰よりも先に採り行くのを楽しみにしていた。

いまはヤマボウシなど、見向きもされない。理由は、ほかに甘いものがあるからだろうと地元の人はいった。

そういえば、リンゴにしてもミカンにしても、糖度がいかに高いかで売れ行きがちがうという。果物に限らず人が栽培する植物はどんどん甘くなっている。

それなのに、こまつしやくれた、といいたくなってしまうような子どもまで、

「あんまり甘くないから好き〜」
とか、ほざく。おかしな時代だ。

だったら、ヤマボウシなど競って採られてもおかしくないのだが、

「だくて、お店で売ってないじゃない」
そんな言葉を聞いていると、店で売っていないものは、すべてダメなもの、うまくないものだ、現代人はそう飼育慣らされてしまっているのだろうか。